

野に生きる・水野葉舟論 (上)

——葉舟の綴り方論と柳田国男——

小田 富英

はじめに

本誌の前々号(第四号、一九九四年三月)において、私は拙論「野に生きる・水野葉舟論序説——『遠野物語』以後の国男と葉舟——」を発表させていただいた。

その冒頭、私は、私が予感している葉舟論の着地点が、次の三点にあることを述べた。

「ア、葉舟の生活と実践を追うなかから、柳田が創ろうとした学問の創成の鍵を見つける。

イ、二人の交流と、佐々木喜善、高村光太郎を經由して、宮澤賢治へと続く文学論を掘り起こす。

ウ、葉舟の国語教育、とりわけ、綴り方教育への態度を明らかにすることで、生活綴り方運動を中心とした当時の作文教育を批判検討する。」

本稿は、この三点のうち(ウ)である水野葉舟の綴り方観と、その実践者としての姿を追うことで、今もまだ連続として続

いている生活綴り方的教育観の批判的検討の一視点を提起することを目的とするものである。

一、国語教育者としての「本式の仕事」

関東大震災後の東京に、再婚したばかりの妻文を残したまま、葉舟は、友人高村光太郎が自著の挿絵画家であった山脇兼治郎のために用意していた駒井野の開墾小屋を譲り受けて、ひとり移り住んだ。大正十三年二月のことである。この時から十年ばかりの間、自らの手で土を耕し、小さな鳥や草木を「隣人」と愛し、それでもなお「本式の仕事」(『大水野日記』昭和八年六月二十日)を求めて苦悩する葉舟についてはすでに触れてきたつもりである。

そこで、前々号では詳しく触れることができなかった、国語教育者としての葉舟について、まず述べていくことにしよう。

大正十五年十月、当時日本勧業銀行監査役であった父水野

勝興が、芝区三田綱町の自宅で逝去した。続く十一月、前妻との間に生まれた子供達の面倒をみてもらっていた妹きくの急逝、それにまた追いうちをかけるような母実枝の死、葉舟がひとり苦闘している間に相次いで起こった肉親の死は、葉舟を社会から孤絶させておくことはなかった。

上京して資産を整理し、遺産の多くを二人の妹に分配して、その残ったお金で、「藁の穴」とよんでいた小屋の隣りに三千坪の土地を買い求め、新しく「ランプの家」を建て、東京から妻文を呼び寄せるのだった。

実生活者としても、もはや逃げ場がなくなった葉舟は、貧しい農村の開墾者として毎日の生活に追われることとなるが、その中で一人の人物に出会うこととなる。

前々号でも述べた「葉舟日記」に登場する、柳田家を葉舟の指示で訪問している染谷四男也である。

染谷は、昭和三年、教員仲間数人と意気投合し、印旛郡国語教育研究会を発足し、その年の五月十二日には、成田小学校で創立開会式を行なっている。顧問のなかには、野口雨情や浜田広介らの名もあり、教員だけの会でなかったところから、その志は伝わってこよう。その染谷が、遠山小学校の教員から、明治の文壇で活躍した水野葉舟が近くに住んでいることを聞き、早速足を運んだのである。

その時の印象を染谷は次のように述べている。

「私が、遠山小学校教員の紹介で水野葉舟とお目にかかったのは昭和四年であつたと思う。その後再三あう機会にめぐまれて国語教育言葉の問題、地方文化について話し合うことに肝胆相照らすか、私の師友として感嘆することも深く、国語教育研究会の指導者として、この人こそと思ひ顧問にいただいたのである。」

葉舟にとって、染谷をはじめとする現場の教員達との出会いは、「本式の仕事」へと向う決定的なでき事となつた。昭和五年夏、葉舟は、成田小学校で開かれた綴り方の講演会の講師として招かれた鈴木三重吉と再会する。三重吉との最初の出会いは、明治四十四年頃のことであつた。三重吉が、成田中学³の教員を辞して上京してきた直後のことである。

この時の思い出を、葉舟は次のように記している。

「どの季節であつたか、本郷の徳田秋聲氏を訪ねて、そこで故人（三重吉）と落ち合つた事があつた。その時にどういふ話の順序からか私が當時の青山の郵便局傍の古本屋でモーパーサンの初版のすばらしい挿繪のある本を見つけてある事をおしやべりした。さうすると鈴木君もやはりそれを見つけてゐた。それでは、ジャンケンをして勝つた方が買ふといふ話になつた。」

ジャンケンには私がまけた。そして私は實に残念だつたがその本をあきらめさせられた。鈴木君は多分その本を買はれ

たに違ひない。故人の蔵書の中に収めて今でもその本があるだらうか。」

その最初の出会いから二十年、三重吉は、童話雑誌として一世を風靡した『赤い鳥』によってその名を不動のものとしていた。この時期は、経営危機から廃刊に追い込まれていた『赤い鳥』を、愛読者会を中心の会員制出版に移行する準備期間でもあり、三重吉自身の宣伝意図は大きいものがあつた。その三重吉を成田に招いたのは、成田中学での教え子達であつたという。その中心が、後に日本シダの会の会長にもなる行方沼東である。

葉舟は、この時の二度目の出会いを次のように思い出している。

「ずっと近い頃になつての鮮明な記憶は、『赤い鳥』復活の時にこちらの國語教育研究會の團體に講演をされるので成田に来られた時。夏のあつたさかりであつた。その時に私は成田で久々で逢つて三四時間話した。その時に鈴木君は、純粹な心持のいゝ興をもつて、成田中學の青年教師時代の話をして下さつた。」

葉舟は、この一年の間に会つた、自分を慕ってくる情熱的な青年達と、鈴木三重吉らを育んだ成田の文化的土壌に接し、生活は苦しいながらも、駒井野に移り住んだ自らの人生が間違つていなかったことを実感していたにちがいない。

葉舟は、早速、『印旛郡児童文集』の発刊にむけて、二百名近くに会員が膨んだ印旛郡國語教育研究會の教員達に協力を要請している。昭和五年十一月のよびかけに応えて、翌年の一月には郡内四十八校中、四十六校から児童作品が集められたというから、当時の社会的な氣運もいかに熟していたかを伺い知ることができる。

六月末に刊行された『児童文集』は、早速友人知人達に送附された。受けとつた高村光太郎は、次のような葉書を葉舟のもとに送っている。

「此間染谷さんといふ方から『児童文集』をもちました。時々読むのをたのしみにしてゐますが、二三日うちに岩手県の方へ旅行にゆかうと思つてゐますが此本も行李へ入れてゆきます。遠野物語の地方へゆくわけですが多分遠野や盛岡へは廻れないでせう。重に海岸地方をまはります。今年は割に涼しい夏ですが鳥や何かにはいけないのでせう。皆さまの御健康をいのります。」

光太郎の方から『遠野物語』について触れているのは驚かされるが、葉舟にとっては、自らが選んだ新しい仕事を、こうして理解してくれる人がいることで勇氣を得たにちがいない。

二、葉舟の綴り方論の位置

では次に、葉舟が、これらの児童作品と向き合つて、何を考え、何を見つめようとしたのかを探ってみることにしよう。成田山で発行している雑誌『新更』のなかで、「児童の作文」の企画を思いついた葉舟は、次のようにその趣旨を述べている。

「今月から、方々の小學校の先生と打合せをして、子供の作品を送つて頂く事にしようと思ひ立つた。印旛郡には既に立派な『児童文集』の年刊があるが、あれがある故に、更に一層もつと徹底した批評をして見たいと思ふ慾望が私に起る。そしてそれを更らに一印旛だけではなく、他にもつと廣く集め、それぞれに就いて考へて見たいと思ふ心が起つたのであつた。

第一回は、成田小學校の三年生の四の組作品五篇のうちから以下の分を採録して、私の所感を述べる事にした。斷つて置きたいと思ふのは、かういふ採録は、どの雑誌、どの新聞でも優秀のものを選んである。私はさうする事を必ずしもいふと思つてゐない。

それはかういふ理由からである。元來初等科の學校の子供の作文を、大人の『或る標準』で簡単に優劣を定めてしまふのは、決して綴り方科の教課の徹底にはならない。子供には

それぞれの個性が成育し形づくられようとしてゐる階程に……今『成り立ちつゝある』といふ時の上に居るのであるから、少くともその童心が話をし書き表すのに、定つた巧拙を考へてしまはない方がいふと思はれる。つまり児童の作文に巧拙を考へるよりも、一人の子供が昨日はどういふ作品をつくり上げたか、今日はどういふのを書いたか、それを見守りながら、その『人』を考へる事が必要である。」

この最後の三行などは、現在の教育現場でも声を大にして言われていることであり、葉舟の「個」に基盤を置いた論潮は、当時としては全く新しいものであつたと言つても過言ではない。

さらに続けて葉舟は、「これまでの綴り方」は、「その心から生れるものを言ひ表さうとするより先に、作文を書くの或る安易な技術を我知らず覚えてしまふ」ものであつたと痛烈に批判するのであつた。

葉舟の脳裏に浮ぶ「これまでの綴り方」とは、言うまでもなく三重吉の『赤い鳥』の綴り方運動であつた。

大正七年七月一日に創刊された『赤い鳥』が切り開いてきた綴り方運動は、子供が子供の生活に即した題材で、自由に書き綴ることを定着させたことにその先駆性があつた。

しかし、号を重ねるごとに、芸術性の高い作品のみが注目されるようになり、「作家以上の豊かな表現力の作品」とし

てもてはやされてきていた。

三重吉自身も、それらの作品を集めて世に出した『綴り方読本』(昭和十年十二月)の序で次のように述べている。

「往年、『赤い鳥』の綴り方が、まだ今日の発達の半ばにも到らないころ、現存の、文壇の名家某君が、そのときの入選綴り方を見て、『今後は、作家も君のところに入選しなくては文壇へ出さないことにしたいね。』と冗談を言ったことがあった。作家たちに、いはゆる表現のまづい徒輩が多いことの無用な痛罵よりも、より多く、児童のすばらしい把握と感受とに驚いた賛辭であつたのはいふまでもない。」

全国から集まってくる何万という児童作品を「選ぶ」という行為によって、文章表現力は高まったかもしれないが、心を刺激するものではない。葉舟は、この時点で、こうつぶやいている。一篇の優秀な作品を見つけるのではなく、ごく普通の稚拙とも思える子供の表現のなかに魂の叫びを聞こうとしたのである。

葉舟と期を同じくして、全国各地で、『赤い鳥』綴り方を超えようとする試みがなされていた。

たとえば、そのうちの一人が、『土の綴り方』(昭和三年)を刊行した富原義徳である。

「あるがまゝの自己を綴ればよい。」「児童の魂を深めたらよい」と主張した富原は、学級の児童に綴り方の心得を次の

ように整理し、指導している。

「A 綴り方とは

なによりも自分の心を信じて、自分の心を自分の言葉で描くことである。あるがまゝを、ありのままにあらはせばそれでよい。なんにもむずかしいことはない。(中略)

自分の魂の光を信じて

1 自分の生活を中心として

2 自分の言葉で正直に

3 ありさまをありのままにこまかに

綴る心の姿勢はかうして正される。綴る力はかうしてみられる。

B よい文とは

きれいな言葉をはりがみした文ではない。まして、きざな言葉の行列では無論ない。(略)「

富原の『土の綴り方』に続いて刊行された木村文助の『村の綴り方』(昭和四年)においては、もっとはっきりと『赤い鳥』からの離脱を見てとることができ。

木村文助は、生活綴り方運動の拠点であった『北方教育』に創刊号から参画した一人であった。倉沢栄吉は、木村の位置づけを次のように述べている。

「このようにして、『赤い鳥』綴り方の自然主義リアリズムは、当時の郷土教育思想の影響を受けつつ、著者の実践を

通じて、現実の教育実践の場に生かされることにより、生活的観点を獲得していった。まさに彼の業績は、『赤い鳥』の文芸綴り方を彼流に発展させて、生活綴り方へ導いていった点に求められ、その意味で彼は、『赤い鳥』から生活綴り方へのかけ橋的役割を果たしていたと言える⁽¹⁸⁾（傍点・倉沢）

あえて比喩的に表現してみると、私には、この構図が、『赤い鳥』という滑走路を飛び立った「綴り方」という名の飛行機が、「生活」という燃料を積みながらも、目的地在「村」や「郷土」である生活綴り方運動と葉舟のような「個性」とか「個の自立」といった近代主義的な地点へと向かう理論と大きく二つに分かれて飛んでいく様が見える気がする。それは、明治末期からはじまり、大正デモクラシーを経て、昭和初期の社会変化の波をくぐってきた綴り方教育の大きな分岐点であったのである。

三、葉舟と三重吉の綴り方論の位相

成田に鈴木三重吉を招いた行方沼東や、その友人、山田清吉らは、水野葉舟を囲む小さな会を作った。昭和七年、七人の若き文学青年が集まったことから、「七葉会」と名づけられた。別名を「S・Y・W」（ソサエティー オブ ヤングライターの略称）と言ひ、『千葉毎日新聞』にコラム記事を書き送ってもらい、

「新更」で詩の選者ともなっていた葉舟が「児童の作文」を書いた昭和九年、『さそり』という同人内回覧雑誌が創刊された。

「さそり」という命名は葉舟によるもので第一号の表紙には、葉舟の古くからの友人、野尻抱影⁽¹⁹⁾の蠅座に関する一文が掲げられた。

昭和十年四月に発行された『さそり』⁽²⁰⁾第四輯（昭和十年四月）の「消息」に葉舟は、「三月は思ひがけなく仕事が出来ました」と充実した日々を紹介し、それらの仕事を次のように列挙している。

「▲私は今下総郷土研究会座談会を計画してゐます。新更会の澤田五郎氏に相談するつもり、そしてその筆記は『新更』に載せて貰ふ心算。

▲新更の詩の集会が多分出来さうです。

▲近々に印旛郡児童文集が刊行されます。第三巻。

▲三月中旬以後、私の⁽²¹⁾の発表されたもの。

「籠屋の死」（村の無名氏）短篇（三月） 日本勸業

銀行月報

「ものを見ること」 文話（三月） 利根ヶ丘

「綴り方と修身との交渉」（上）（四月） 国語教育

「言葉とがめ」（一）（四月） ローマ字

散歩・採集（五）（四月） 国民文学

閑村随筆 (四月) 書道新界
調べる綴り方私見 (四月)

柳田国男の民俗学への資料提供をも目的としていた下総郷土研究会については、本稿で触れることはできないが、この一ヶ月の間に、『児童文集』をはじめ、綴り方への論者が二本も入っていることで、その力の入れ方が伝わってこよう。

最後の「調べる綴り方私見」は、掲載雑誌名が無いことから、発表目的に書いたものではないのかもしれない。しかし、「調べる綴り方」か「調べた綴り方」とかが、議論されている時代であることから、葉舟が、その時代の綴り方実践に對して、目配りを忘れてはいなかった証左とはなるう。

毎年のように『児童文集』を刊行し、綴り方理論に對して目配りを忘れずに、自己の寄るべき地点を確認していた葉舟のもとに、三重吉が、今までの児童作品を集成した『綴り方読本』を刊行したとの知らせが入った。

葉舟は、この時のことを、次のように懐古している。
「最後には、今年になって『綴り方讀本』が出た時に、私にも意見があるからそれを公にしたいといふ手紙を出すと、あれなどは極めてあたりまへの事で意見がある筈がないといふやうな返事が来て、私は獨りで面白くなつてしまつた。」

実際は、昭和十年の十二月に刊行されているので、刊行してしばらくたってから山田清吉に借りて読むことになるのである。

ちょうど、『綴り方讀本』刊行直前に、葉舟は、山田を介して三重吉に、『赤い鳥』への執筆の意向を伝えている。

山田によると、葉舟の意向は次のようなものであったと言う。

「私もやうやう製作に情熱が集中してまゐり、晩年の仕事に熱中する状態になつて来ました。それでなるべく仕事を単純にし余計なものを止めてゆきたいと思つてゐます。」

取りあへず当分小品と子供囃を多く書きたい氣でゐます。後の方は民話を基礎としたもの、それと純製作的のもの、ただこれについては発表する場所がないので弱つてゐます。何れ直接に手紙なり、訪ねてなり鈴木君に相談したいと思つてゐますが、お序でがありましたならば、『赤い鳥』の方の内意をお聞きとり願へますまいか。」

葉舟はこの時、宮沢賢治の作品に没頭中であつた。前述の『さそり』第八輯(昭和十年八月)の「消息」欄に、私生活における絶望によつて原稿が書けない状態を嘆きながらも次のように結んでいる。

「○この頃読んで驚嘆し尊敬の念に堪へないのは「宮澤賢治全集」である。第一、第三が既に刊行されてゐる。第一は詩

集、第三は童話集。こんな立派な童話が、他の誰に書けるか、と私は思つてゐる。この童話については何れどこかに感想を披瀝するつもりである。」

「感想を披瀝する」ことになるのは、昭和十四年の九月に草野心平からの依頼で書いた「宮沢賢治氏の童話について」(『宮沢賢治研究』)である。葉舟が賢治の童話に触れるのは、『注文の多い料理店』が刊行されてから、高村光太郎と千恵子に勧められた時からである。

葉舟が書きたかった「子供噺」が、賢治童話の延長上に位置づくものであったとしたら『赤い鳥』には馴染の薄いものとなつたにちがいない。

山田清吉から葉舟に書かせて欲しいという依頼を受けた三重吉は、『赤い鳥』五月号を葉舟の許に送つた。

この時のことを、葉舟は、山田清吉に次のように伝えている。

「『赤い鳥』をいただきました。雑誌が淋しく少し痩せてゐます。もつとたつぷりしたものが必要ですね。理科記事、あれでは面白くないではありませんか。それで鈴木君に手紙を思ひ切つて書きました。(批評はしません。したら怒られます)『綴方読本』についての用事と僕の民話から出発する童話風の製作を載せてくれるかの相談でした。」

「綴方読本」の感想を書くつもりです。差当り自由のき、

教育雑誌がふさがつてゐるので、どこで公にしたものかを考へてゐます。これは内緒ですが、鈴木君の雑誌の痩せてゐるのを見て、つくづく反省させられました。近頃僕も人並みになりかけて来ました。全く刻苦勉強です。」

この時三重吉は、「雑誌が痩せていた」だけでなく、自らの体もまた病魔に犯されていた。そのことにうっすらと気づいていたかのように、葉舟に宛てた返事は次のようなものであった。

「お手紙有難うございました。今年は時候が悪いのでまだ引籠つてゐます。綴方読本をお読み下さつたことを拝謝いたします。私の所説には貴君のお考へに反する点が数件ありましたさうで意外です。なぜと言へば私の説くところは実用本位の常識論故、平々凡々な代りに、ウソはないと思つてゐたからです。呵々。童話は一篇拝見して御返事をいたします。いろいろと失礼をお許し下さい。」

四月二十三日 鈴木三重吉

これが、葉舟が「独りで面白くなつてしまつた」という返事である。

葉舟は、この返事をもらうとすぐ山田に次のような一文を書いた手紙を送つた。

「先日鈴木君に書いた手紙が少し逆リンにふれた気配があら

す。」

また、前述の「鈴木三重吉回想」に続けて、この時のことを、葉舟は次のように述べている。

「いかにも鈴木君らしい思ひこみ方だと思つた。それで、私は直接あの本と関係があるのではなかつたが、小學校の學校文集についての感想を公にした雑誌を送つた。私はこんな事を立場として考へてゐるのですといふ説明をしたつもりであつた。

○ その返事は来なかつた。變だなと思つてゐると、新聞で鈴木氏危篤の報せを見た。すぐつゞいて他界。私は愕然としてその時、久々で鮮明に故人の顔が思ひ浮べられた。」

ここにでてる「小學校の學校文集についての感想」というのが、現在、近代文學館に保管されている葉舟自筆原稿の「児童文集と教室の綴り方」であらう。末尾の日付は、一九三六年四月七日となっている。発表雑誌は『國語教育』六月号であり、病床の三重吉に送られたものと考えてよい。

冒頭、葉舟は、以下のように記して、自らの立場を述べている。

「児童文集を綴るといふ仕事が、近頃盛んな潮流になつてゐる。それに対して一々親切な批評を書いてゐる教育雑誌を見たり、全国の文集の展覽された席に行つて見たりすると、

到る処の學校でそれぞれ文集が綴られてゐる盛んな勢に目を見張らざるを得ない。この潮流が、生徒の子供たちにとつて幸であるか否かを考へるより、今の場合は、その仕事が眞に考慮されて行はれてゐるのか否かを考へる方が眼前の必要のやうに思はれる。」

さらに続けて、「以前より（児童文集は）児童の文學作品であることを「誰も疑はず」にいたことを反省しなければならぬと言ふ。

さらに、そうした片寄つた「文章観」によつて、「巧い拙いをその標準から定めて行く」ことは、綴り方を「技芸方面の一課目」に落としていくことだと続けている。

「學校作文は絶対に『文學』を基準として考へてはならぬものである。それよりもっと広く子供の全生活の機能に對して見渡した心でそれを判断しなければならぬものである。」（傍点・筆者）

更に続けて、当時ブームにもなつていた児童文集編纂の動きを二つに分けてゐる。その「一種」が多くの作品の中から「優秀」なものを選び出して綴つたもの、「二種」が、「一つの學級で綴られた文集であつて、その教室の生徒の作品をどの子供のも一篇以上必ずその中に収めてあるもの」であるとしている。

自分自身も、印旛郡の児童文集を作成するにあたっては、

どうしても「文学作品集」や「児童文芸の集」になつてしまふこともあり「我ながら仕方のない事」と思うと反省もしている。

要は、指導者や選者が、自分を「省る事を忘れてはならない」のであって、綴り方に対する信条を次の点に置くべきだと力説するのだった。

「子供たちのものの考え方、ものを見る力、判断、そしてそれを言ひ表す能力と気品とをどういふ風に求めてゐるかといふ事である。」

「教室の綴り方は、文集に選ばれた作品よりもずっと考へる範囲が広く、仕事が大きい。それは、生徒の作品を見るにしても、出来ばえのいい悪いなどは、むしろ末の問題でそれよりも更に重要な考慮が、指導者の心の重石とならなければならぬものである。」

その後、みんなから「猿」と綽名をつけられ、学校を休んだという子の作文を例にあげ、次のようにも述べている。

「かういふ子供たちをして、片言を言はず不完全な説明をせず、吾々の民族の言葉をもつて自由にその意志を述べ、正しくものを考へ判断させるやうに『言ひ表し』の機能を教育させる事が大切な作業の一つであると思はれる。」(傍点・筆者)

そして最後に、次のように結ぶのだった。

「願くば、教室での綴り方を文集に収めるやうな巧い作品といふ標準を立てられないやうに。又、更らに綴り方の目的を児童文学と混同されないやうに。この誤謬をつゞけられるとしたならば、恐らく初等科学校での最重要な学科が死物となるばかりでなく、弊害の多いものとなるであらう。」

(一九三六年四月七日)

この原稿が載つた雑誌は、『国語教育』六月号で、三重吉に送つた「雑誌」であることはまちがいはないが、病床の三重吉に届いたとしても読める状態ではなかつたろう。

一読してもわかるやうにこの論考は確かに『綴り方読本』や『赤い鳥』の綴り方に対する挑戦状である。

かといつて三重吉の綴り方論が、葉舟のそれと決定的にかけ離れているかという点、そうとは言えない。三重吉自身も次のように述べ、世間の解釈に修正を加えようとした。

「なほ、多忙な私は、やつとこの機会に、私が多年來主張してゐる、綴り方の根方理論と實際製作の指導の主要点とを、はじめてまとめて附記し、なほ、在来の綴り方の研究家たちの所論の錯誤や、実際の教課における欠点をも指摘し、また最近にとなへ出された綴り方の新流派なるものについても批判を加へておいた。」

しかし、理論が崇高なことと、具体的な各論なり結論がそれと同じレベルであることは必ずしも一致しない。特に、

教育の場ではなおさらである。

三重吉は、「私の綴方改革の出立においてはじめて綴方は、『生活の記録である』といふ言葉を使つて強調した」と自らを位置づけようとするが、どこか混乱收拾のための弁解がましく聞こえる部分が多々ある。三重吉自身の主要な関心は、どのような題材を選ばせるかにあつて、「感じたこと」も「考えたこと」も同じ段階で表現することを目的としているところに弱点があるように思える。

いずれにしても、三重吉にとつても『綴り方読本』は、自らの意図に反して、政治的な色合いが濃くなつていった綴り方運動へ歯止めをかけることを目的にしたのであつて、葉舟の異論に対して、「実用本位の常識論故、平々凡々な代りに、ウソはない」と苛立つのもうなづける状況にあつたと言えよう。

志半ばで病に倒れた三重吉に対し、葉舟は「失望の感深くこれは自分でもどうしてこんな感じたのかと思つてくらしい、今朝からその事を考えていました」と、深い同情を寄せるのだった。

こうして見ると、三重吉と葉舟の綴り方論が、論争の形で後世に残つたり、具体的な作品をめぐつての評価で分かれたりしたならば、もう少し豊かでわかりやすい綴り方理論が登場したかもしれないと思うのは、私だけではないはずである。

四、柳田国男の国語教育論と葉舟

葉舟の『新綴り方読本』（昭和十三年六月、春陽堂文庫）は、こうしたやりとりの最中に生まれた。

「春陽堂の人」が、葉舟を訪ね、葉舟風の『綴り方読本』を出版しないかと勧めたのが、三重吉が死去する直前のことであつたという。

この「春陽堂の人」こそ、高藤武馬であつた。昭和六年、雑誌『方言』を刊行して以来、担当編集者として柳田家に足しげく通つていた高藤が、柳田から、葉舟の存在を教えられたのである。

柳田も、昭和六年以来、毎年、葉舟から送られてくる「児童文集」については、葉舟の「子供の文章に対する観察に大いに興味を動か」されていたのであつた。

そして、この本がようやく陽の目を見たのは、昭和十三年六月のことである。葉舟は、高藤武馬から、上梓したことを知らされるとすぐに山田へ手紙を送つた。

『新綴り方読本』はもう出来たそうですからそのうちに差上げます。高藤君から今日来た手紙に（私はまだ本を見ません）ほめてくれました。しかし要するに悪事を行はなかつたという程度の本です。鈴木君とは全然反対の意見で、私は鈴木君の綴り方論の一部を訂正したいのです。私は子供に文学

を強いる風の綴り方意見に反対です。それよりも正確、適切な言語表現を希望する方が大切、かつ緊要のものと思つてゐます。『文学的』は間々子供に癖をつけます。そこが三重吉君と一論戦したかつた処でした。かつ文学に対してひどい見解しか持たず、文章の下手な一般教師が文学的と考へる程度は、一層害毒が幼年期の人々に及ぼすものと思はれます。御覧の上お考へお聞かせ下されたく。」

葉舟自身が「悪事を行はなかつた」程度と述べたのは謙遜だけからではない。

作品総数二万点の中から、たった七十点だけを選んで文集であることと、「少年文庫」として子供達をも読者として想定しなければならなかつた制約を意識したからと考へられる。かつて、「教室」というひとつの小さな共同体を構成する全員の文集が望ましいと説いた葉舟にとって、理由は何にあり、作品を選ばざるを得なかつたことに、自責の念が働いたことは容易に想像できることである。

そんな葉舟の許に柳田からも、「新綴方読本ハ御想像以上の楽しみを以て精読」したが、「残りの一万九千九百通も何とか利用して」欲しいという感想が寄せられるのだった。

柳田国男は、この頃、昭和十年五月の「片言と方言と」をはじめとして、十二年七月の「昔の国語教育」など、後に、

『国語の将来』（昭和十四年九月）に収録される一連の論考を發表してゐた。

「片言と方言と」は、前々号でも述べたように葉舟が柳田に出そうとした手紙の中で、「特に、五月と九月の『方言』の「片言と方言と」には感動を深くしま志した。それをこちらの郡の国語教育研究部に一応是非読ませたい」と書いた論考である。

「次の代の國民に、出来る限り片言をいはせない様にすること、是を私などは國語教育の一ばん重要な役目と心得て居る。」

葉舟をして、「かういふ子供たちをして、片言を言はず、不完全な説明をせず」と言わしめた源がここにある。

続いて柳田は、次のようにも述べて、葉舟を勇気づけるのだった。

「緊要なる一點は、何が國語教育の成功であり、國語發達の兆候であるかを、最も明確に知つて置くことだと信ずる。

字が上手、讀方が達者などは勿論末の末で、目的は各人が口でなり筆でなり、自分の言はうと思ふことがいつでも自由に言はれて、しかも豫期の効果を相手に興へ得ることではなればならぬ。望んでも心を表はすべを知らず、たまたま言へば誤つて笑はれ、それを怖れては人中で無口になり、もしくは感心されたさに暗記して居て、心に思ふことと合するか否

かを、確かめても見ないことを言ふ者が出るうちは、どの道本當の國語教育をしたことにならぬのである。」

「自分の言はうと思ふこと」を自由に言うことができ、「しかも豫期の効果を相手に興へ得る」ものでなくてはならないという理論は、葉舟の、子供のものの見方考え方を表現する力をどうつけていくか、しかも気品高く、という姿勢と結びついている。

今だからふり返ることができることなのかもしれないが、名著と言われる『國語の将来』の論考は、三重吉から葉舟に至る、日本の綴り方教育を底辺としながら、葉舟らが組織したと同じような郡単位の教員集団や、その努力によって編まれた『児童文集』に牽引されたと言えるのである。

時が経って、敗戦後、柳田は、一時、教育に自らの力を結集する時がある。

この情熱と言つてもよいほどの柳田のエネルギーは今も様々な言説で評価、批判をくり返し受けている。が、私には、悪戦苦闘の末、志半ばにして散っていった葉舟らへの鎮魂の論に映るのである。

敗戦直後、『赤い鳥』を継承しながらも、その芸術至上主義を克服しようとした『赤とんぼ』が創刊されている。選者は、川端康成である。川端は、葉舟の批判を知っていたかのように、次のように「選の言葉」を述べたのだった。

「綴方をあまりに天才的、あまりに芸術教育とすることは、一般にはもとめるべきではないのかもしれない。大人の驚嘆ばかりを児童から引き出そうとするのはどうでせうか。かういふ選は非凡を好む傾きになりがちですが、健全な平凡も私は重んじたいと考えます。つまり、すべての児童がこの程度の綴方は書けるやうであつてほしいといふ基準を、わすれないようにつとめます。児童の精神と生活とを確かにする役目も、綴方に持たせたいのです。」

川端の「平凡」と「非凡」の対比は、柳田のそれを彷彿とさせるところがあるが、川端は「すべての児童がこの程度の綴方は書ける」ものであつて欲しいという願い自体が「非凡」であるということに気づいていない。

戦後の民主主義教育の出立にあつて隆盛になりつつある、こうした作文教育の流れに対して、柳田は、次のような冷めた眼で批評するのであつた。

「文章を書くことを、今でも學校ではツヅリ方といつて居るらしいが、あれはこの際一つ、やめてしまつてはどうだろうか。第一にツヅルといふ言葉は、日本ではもう使ふ人が少なく、子供などには意味を知らぬ者が多い。(中略)

そんなら是を罷めて、何と呼ぶことにしたらよいか。サクブンといふのは漢語だけれども、日本人も久しく使つて居る。作文といふ文字がやさしいばかりか、耳で聴いてもわかるか

ら、今ならばサクブンといつても少しも差支へがない。しかしそれよりも便利なのは、書き方といふにこしたことは無い。書き方は今までは習字、すなはちオテナラヒの名になつて居るやうだが、是なども本たうは改めた方がよいのであつた。

カクといふ言葉を、字と文章との両方に使ふことは、よその國でも決して珍しくないが、殊に日本では手紙をカク、小説をカクなどと、文章の方に主として用ゐて居て、あの人はカクのがすぎだといへばこの方の意味になり、シヨとか字をカクと言はないと、學校でいふ『書き方』にはならない。だから是非とも残して置きたければ、字の書き方といはねばならぬ。テナラヒといふ良い言葉が有るのだから、それをもう一度出して使ふのもいゝかと思ふ。さうすれば少しは是から、手習ひが役に立つやうになるであらう。今のまんまの書き方では、學課もその名前も、兩方ともむだなやうな氣がする。」

言うならば、近代學校教育のなかでしか成長しなかつた綴り方教育の盲点をついた言葉であらう。

葉舟自身も、前述の自らの論文のなかで、「學校作文」という相對化した言葉をつかつてゐる。自らの長女美子を、學校に通わせないで家庭内で教育をした經驗をもつ葉舟なら、その言ひ様である。

しかしこの時、柳田のよき理解者でもあり、実践家として柳田に勇氣を与え続けた葉舟は、すでに他界してゐた。

柳田は、その葉舟のくやしさを代弁するかのようになつて、前代（近代以前）から現代に至る綴り方教育を次のように總括するのだつた。

「つまり今日の言葉でいふツヅリ方の教育が、昔は非常に不完全だつたのである。この結果として、面白くないことが少なくとも三つはある。その一つは成るだけ書かずにはしまはうといふ人が多くなつたこと。第二には、書くときはいつも人の書いたものをまねて、をかしまきまり文句ばかりが多くなり、文章がそら／＼しいものになつてしまつたこと、更に第三には、たまく／＼一人か二人の達者に書く者があると、たちまち降参してその人の書いたものを、よくも考へずに頭から感心してしまふことである。この三つの弊害は癖になつて、こまつたことには今でもまだ續いて居る。」

注

- (1) 染谷四男也「野の人水野葉舟」(『成田史談』第二九号・成田市文化財保護協会発行・昭和五九年三月) 十一ページ
- (2) 水野葉舟「鈴木三重吉氏回想」(『赤い鳥』鈴木三重吉追悼号、昭和十一年十月刊) 二百八十七ページ
- (3) 鈴木三重吉は、明治四十一年、東京帝國大學卒業後、成田山新勝寺の石川照勤貫首の招きで、成田山経宮の成田中学に教頭として赴任することになる。二十六歳でいきなり年俸八百円という破格の扱いであつたことや「學校を休んでもよいから、よい小説を

書け」と激励した石川貫首の存在にふれ、水野葉舟の次男水野清は、「近代文学の保護者という立場からも、もっと評価されてもよいのではないか。」と指摘している。(水野清「いま「赤い鳥」が甦る・知られざる鈴木三重吉」「サンサーラ」平成六年九月号・百六十一ページ)

(4) 本名 行方富太郎。戦後、成田町小、中学校の初代PTA会長を経て、二代目教育長となる。行方の友人でもあった山田清吉は行方の多方面にわたる業績を、「日本シダの会」会長・行方沼東の思い出(『成田市史研究』第一号・昭和六十二年三月・成田市立図書館編集)に発表している。

これによると、行方は、昭和十三年一月、『日本山岳会報第七十二号』に、「利根川図志の著者赤松宗且義知」を発表し、柳田国男から賞賛と感謝の書簡を貰ったことがわかる。

(5) 水野葉舟、前掲文、二百八十七ページ。

(6) 染谷四男也、前掲論文、十二ページ。

(7) 高村光太郎 葉舟宛葉書。昭和六年八月五日付(『光太郎と葉舟』一九八九年五月 葉舟会刊) 二百四十七ページ。

(8) 「宮澤賢治と柳田国男」というテーマも、私の水野葉舟論の三本柱のうちのひとつであるが、この葉書にあるように、高村光太郎に「遠野物語の地方へゆくわけ」と言わしめる事実がどのようなものであるのか気になるところである。

(9) 水野葉舟評「児童の作文」(『新更』第五卷第一号・昭和九年一月) 二十八ページ。

(10) 鈴木三重吉「綴方読本」(昭和十年十二月・中央公論社) 二ページ。

ジ。

(11) 富原義徳「創作鑑賞 土の綴り方」(昭和三十年十月 厚生閣書店刊)『近代国語教育論大系13』昭和五十一年七月、光村図書)に収録・二十六ページ。

(12) 富原前掲本・四十四ページ。

(13) 倉沢栄吉「解題・解説」(『近代国語教育論大系 13』光村図書) 四百九十四ページ。

(14) 野尻抱影は、水野葉舟とは早稲田大学高等予科時代の一年後輩。大正十年に葉舟と共に日本心霊現象研究会を結成する。

(15) 昭和九年から十六年の八年間に三十一号発行されているが、山田清吉氏より成田図書館に寄贈され二十一冊が現存している。昭和初期の青年教育や地方文化を探る上からも貴重な資料である。

(16) 上田庄三郎「調べた綴り方とその実践」(昭和八年)や、千葉春雄編「調べる綴り方の理論と指導実践工作」(昭和九年刊)がその代表作であろう。

(17) 水野葉舟「鈴木三重吉氏回想」前掲書 二百八十八ページ。

(18) 山田清吉「水野葉舟と鈴木三重吉」(『楡の木』昭和四十年十一月号) 四十八ページ。

(19) 山田清吉宛 水野葉舟書簡 昭和十年十月二十五日(前掲論文より引用)。

(20) 成田図書館蔵『さそり』六輯 四十六ページ。

(21) 山田清吉宛 水野葉舟書簡 昭和十一年四月十一日付(前掲論文より引用)。

山田清吉氏の話によれば葉舟が本気になって「赤い鳥」に書き

たいと思っていたわけではなく発表誌を求めていたのでであろうということである。二人の間に入った山田氏は葉舟と三重吉は相入れないものを感じたと語っている。

(22) 水野葉舟宛 鈴木三重吉葉書 昭和十一年四月二十三日付

(〔鈴木三重吉全集〕第六巻)。

(23) 山田清吉宛 葉舟書簡 昭和十一年四月二十四日付 (前掲論文より引用)

(24) 前々号の拙論の中でも述べたが、葉舟の御子息の水野清氏のご快諾を得て、「葉舟日記」が保管されている近代文学館に通ったのが三年前の夏であった。その時、「日記」と一緒に葉舟関係のファイルにあったのが、本論考である。その時、私は、葉舟の論潮のなかに、現在の作文教育に対する批判にも通ずるものをもみ全文を一気に写してきた。今、改めて読み返してみても、鈴木三重吉との関係をも含め、大きな問題提起をしている論考であると思ふ。

(25) 鈴木三重吉「綴り方読本」(昭和十年十二月刊、中央公論社) 四ページ。

(26) 鈴木 前掲本 五百六ページ。

(27) 山田清吉宛 水野葉舟書簡 昭和十一年六月二十八日付 (水野葉舟と鈴木三重吉統「楡の木」 昭和四十年十二月号) 五十八

ページ。

(28) 高藤武馬は、春陽堂への就職のいきさつを、著書『ことばの聖』(昭和五十八年八月、筑摩書房)に書いている。「葉舟日記」にも柳田家を訪問した後、近くの高藤武馬を訪れる一節がでてくる。

(29) 水野葉舟宛 柳田国男葉書 昭和九年一月一六日付 (遠野市立博物館所蔵)。

(30) 山田清吉宛 水野葉舟書簡 昭和十三年六月二十五日付 (山田 前掲論文 六十ページ)。

(31) 水野葉舟宛 柳田国男葉書、昭和十三年十月二十七日付 写真 入自製(遠野市立博物館所蔵)。

(32) 「國語教育への期待」原題「片言と方言」と(定本 柳田国男集)第十九巻) 百八十七ページ。

(33) 柳田国男 前掲論文 二百二ページ。

(34) 川端康成「選の言葉」(『赤とんぼ』昭和二十一年四月、実業之日本社) 三十五ページ。

(35) 柳田国男「話の話」(『信濃教育』七四八号 昭和二十四年十二月) 『定本 柳田国男集』第十九巻 五百二十二ページ。

(36) 三年前はじめて葉舟の「児童文集と教室の綴り方」を読んだ時は、私はその中に出てくる「学校作文」という言葉を見て驚いた。それは、私が所属するもうひとつの研究會である、全面教育学研究會(庄司和晃氏の提唱する全面教育学を實踐し、理論を追究する會)では使い慣れた言葉ではあったが、近代学校教育を相対化しているその言い様は、私達のオリジナルなものであると思っていたからである。

(37) 柳田前掲論文 五百二十三ページ。

伊那民俗研究

第 6 号

1996年9月

野に生きる人・水野葉舟論(下)

『民俗学者』としての水野葉舟

小田 富英

はじめに

水野葉舟のご子息清氏から、遠野市立博物館に貸与されている葉舟宛の柳田国男の葉書は、全部で二十三枚である。そのうちの一枚、昭和十六年九月二十一日付の写真入り自製葉書の文面は次の通りである。

「其後ノ御様子ハ如何です 私ハ色々ノ事があつて少しよわつて

居ます 式紙の申込ハどんな

ですか 私も二口か三口入るつもりです

次 この五月当地の学校に伺つたと

き 欠伸をシワクムといふと教

へてくれた先生は何といふ人ですか

御記憶なら

御教へ下さ

九月二十日」

今まで述べてきた二回の論のなかで、水野葉舟の文学者、詩人としての側面と、国語教育実践者、青年教育リーダーとしての葉舟の姿を見つめてきた。

今回は、この一枚の葉書をヒントに、葉舟の民俗学者、柳田国男の学問への資料提供者としての生き方に光をあてていきたいと思う。

一、欠伸を「シワクム」と言うこと

この葉書の冒頭の「私ハ色々ノ事があつて少しよわつて居ます」とは、八月の井上通泰の死から、九月の通泰の妻龍子、長女の川村桃枝の死という一連の不幸を指している。

柳田にとつての通泰は、子供の頃から、父親のような存在であり、歌人としても、学者としても尊敬し続けた兄であった。

その通泰の死は、柳田の心を大きく揺さぶったことはまちがいない。まして、毎年、遺言書を書き改め、自分が死んだ

後の井上家の行末を心配していたにもかかわらず、通泰が望んでいた様にはことが運ばなかった。柳田は、その井上家の不幸を、「悲劇」(『故柳七十年拾遺』)としか表現できない立場にいた。

「少し」どころではなく、かなり精神的に落ちこんだ時期であったはずである。

そんななかで、葉舟に、どうしても聞きたいことがあったのである。それは、柳田が、この年の五月二十八日、かねてからの葉舟からの依頼に応じて、印旛郡国語教育研究会の教員たちのために「方言調査について」という講演をした時のことであった。

「この五月当地の学校に伺ったとき」の「当地の学校」とは、遠山小学校のことで、この講演実現までの経緯は、すでに本誌第四号で述べている。

「方言調査について」の講演が終えてからか、欠伸を「シワクム」と言っていることを発言した国語教育研究会の教員がいた。その人の名を教えて欲しいと頼んでいるのである。

柳田にとって、欠伸の方言が、この時、どんな関心のなかにあったのか。そのことをまず述べてみたい。

昭和十七年五月三十日発行の『方言覚書』のなかに「熙譚日録」という小文がある。

二つの章から成り立っていて、一の章が、初出の「熙譚日

録」で、昭和十五年一月の『科学知識』二十巻一号に発表したものである。(『定本』では、二つを区別してはいない。)

自分の住む喜多見の山野から、地名の「クタミ」(米民、玖潭)へと話を進めて、書齋を喜談書屋とした理由を述べ、

「熙譚日録」が始まる。

自分の書齋に集まる旧友と、のんびり話をしている「時事」とは交渉の無い小さな話題」を発表しようというのである。

「日録」の名から、何回かの連載を考えていたとも想像できよう。

続いて、「出来るだけ平凡な、しかも今まで氣をつけた人の無いやうな問題から、大切なことを見付けようとするのが我々の流儀である」と述べ、「欠伸」の問題へと入るのである。

どうして、「欠伸」と書いて、「アクビ」と読ませるのかから、「あけび」との関連、「オクビにも出さぬ」の「オクビ」へと、本当に小さな問題をテンポよくさばいていく。

読者に納得させてから、「斯ういふ方言現象を知つてから、私は更にアクビといふものに就ての日本人の、心理に注意するやうになつた」と、柳田らしい転化で続く。「アクビは人に移るものだ」という心理や、「一緒にアクビをすると三日の親類」という諺など、誰れもが、考えていそうなことに触れることを忘れてはいない。

最後に八丈島の巫女の例を出し、「アクビをし始めるのを、

神に認められた一つの兆候」とし、先に述べた「御籠り」と結びつけるのである。

「方言調査について」の遠山小学校での講演は、この一文を発表した後のことだったのである。

柳田は「熙譚日録」の二の冒頭、次のように述べている。

「この一文を公表してから後、今年の五月に下總成田の近く、印旛郡遠山村の學校に遊びに行つて、測らずも一つの新しい資料を得た。土地の教員寺本君の話に、この邊では欠伸をすることをスワクムと謂ふ人があるが、どういふ意味であらうかとのことであつた。是は全く耳新しい方言であつた。他にもさういふ例があるかどうか。それから以後努めて色々の人に尋ねて見たが、まだ私の方でもといふ人には出逢はない。古い辭書などには無いかと注意して居る。もしも書いたものには傳はつて居ないときまれば、それこそ方言の本當のねうちが現はれるのである。」

柳田はこの後唇を「ツバ」とか「スバ」「スバ」と言う九州、沖繩の例を出し、「スハ」の下に動詞の「クム」が添えられたと想像する。

最後に、「アクビスル」では、歌にならないから困っている人がいるとし、「音の清く、心持のよく通ずるもの」も共に知って、「時と場合に應じて自由に選ばせるやうにして置きたいと結ぶのである。」

この二には、「(昭和十六年九月)」の記述が入っていることから、雑誌に発表されなかつた原稿そのままであることがわかる。

葉書の日付が、二十一日、葉舟からの返事を待って、書き始めたのか、「寺本君」を後から挿入したのか、原稿未調査のため結論をだすことはできないが、柳田の情報収集の方法を伝えるには、好材料の例であろう。

二、下総郷土談話会の設立

印旛郡の若い教師たちに、柳田の「方言」についての考えを聞かせたいとする葉舟の思惑は、この一枚の葉書によって達成されたと言つても過言ではない。

この時葉舟は、柳田が創りあげた民俗学という学問への、資料提供者としての自らの役割を、確認したにちがいない。昭和十一年(一九三六)五月、葉舟は、国語教育研究会と並行して、郷土談話会を設立した。

回覧雑誌『さそり』第12輯に、「下総郷土研究の集り」と題した呼びかけ文がある。

「かねて私が言ひ出してゐたこの集りを、いよいよ今月より始める事にした。それぞれに案内状を出す事にしてゐる。場所は新更会館。幹事は二名乃至三名の豫定、さし當り篠田定吉君。」

さし當り採集しながら学問上の研究をする方針。会の日には誰か話手を捜して、その人を中心に話しあふ事。

その記録は、於もに「さそり」で保存する。各目の仕事がまとまったものは、それぞれ紹介して発表する事。今の交棒のある雑誌は「方言」「旅と伝説」 会合の□□な記事は「新更」に載せる。

会員には制限なし。自由に参加されたし。

以上 世話人

水野 葉舟

五月

この会の名 郷土談話会とする。」

葉舟は、この時すでに、「下総印旛郡の村言葉」を『旅と伝説』四月号に、「千葉県印旛郡方言訛語1・2」を国語教育研究部の名で『方言』昭和十年六月・八月号に、「鳥の名採集」を『野鳥』昭和十年三月号に発表していた。

しかし、方言や農家語彙を集めるとなると一人では時間がかかりすぎるといふことで、若い協力者を求めたのである。

そして、その一方で、郷土談話会を始めた葉舟は、一人の地元の人と出会うことになるのだった。

その老人の名は、甲田健之助。

甲田は、葉舟と出会う二年ほど前の昭和九年十二月十九日

号の『アサヒグラフ』によって、「素人の百姓博士」と紹介されている。

この『アサヒグラフ』の企画は、郷土誌編纂ブームと、江戸期に生まれた前代の生き証人でもある「故老」発掘ブームとがきっかけだったものであった。

甲田健之助は、そうした企画にふさわしい人物であり、この記事は、稲の改良に努め、昆虫や植物の採集と気候の研究を数十年にわたって励んできたことを称え、次のような一文でしめくくっている。

「平常無口で、酒も煙草も口にしない翁ではあるが、翁の人格と経験をしたつて来る者は数へ切れないくらいで、翁もまた農村青年の開発には、進んで尊い蘊蓄をかたむけてゐる。」

この甲田健之助と、地域の青年教育に力を傾けていた葉舟が出会うのに、さして時間はかからなかった。

昭和十二年五月、成田山の薬草園で出会った葉舟は、健之助を、郷土談話会に招くことを考え、設立以来、毎回のように健之助を囲んだ会として運営し続けた。

甲田健之助と葉舟の出会いには、葉舟の小品『隣人』に詳しくいだが、『アサヒグラフ』の記事ではなく、ほんの偶然のでき事であったのである。

甲田の勤める成田山薬草園で出会ったことから、葉舟は、甲田のことを「薬草園のおぢいさん」と親しみをこめて呼ん

だのだった。

この「葉草園のおぢいさん」は、葉舟達に郷土に「在るもの」と「在ったもの」を語る記録の保持者となった。そして、葉舟は、そのことを記録し、「この学問の先輩に贈ろう」と、この時、決意しているのである。

言うまでもなく、「この学問の先輩」とは、柳田国男であることは間違いない。

葉舟は、呼びかけから一年たった正式の会の発足の折、『さそり』同人の山田清吉に次のような手紙を送っているという。

「前々からかけ声ばかりかけて居ました『下総郷土談話会』の発足の会を、六月二十七日午後零時半頃から開きます。時間は正確にいたしたく。会場は新更会館内。主賓に甲田健之助氏。甲田氏に話を聞く会とお思い願いたく。主題「北部下総の植物の土地名及び使用法習慣など。」(中略)実は甲田氏のお話必ず貴重と存じます故大切にいたしたく。

近頃親しくお目にかかるにつれ、御老年の事を考え、我等の手で保存せねばならぬものの如何に多きかを切実に感じて居ます。良く生きぬかれた尊敬すべき老先輩に対するこれが礼で同時に我等の正しき愛情と信じて居ます。」(山田清吉「下総郷土談話会の記」『楡の木』昭和45年1月所収)

山田清吉氏から、直接、毎回甲田健之助を招いて行なわれ

た談話会の様子を聞き、私は興味をおぼえた。それは、ほぼ同時期の木曜会による山村調査と、組織も方法も違う民俗採集の型をみたと思っただからである。

私のその時の感覚は、時がたつにつれ確かなものとなり、今回の葉舟論のベースになっていったのである。

三 郷土談話会の人々

『さそり』同人でもあり、郷土談話会の中心を担った人々の民俗学関係論文は、葉舟を含め以下の通りである。(葉舟の昭和の初めの論文を除く。)

昭和十年

六月 「千葉県印旛郡方言訛語」(『方言』)・印旛郡国

語教育研究部

八月 「同・2」(『同』)・同研究部

昭和十一年

四月 「下総印旛郡の村言葉」(『旅と伝説』)・水野葉舟

六月 「気象に関する俗信俚諺」(『同』)・篠田定吉

七月 「村人の生活の一面——方言によって知り得たる」

(『方言』)・水野葉舟

昭和十二年

十月 「植物による子供の遊びとその呼び名」(『方言』)・

小川景

昭和十三年

- 一月 「草木の土地名」(『方言』)・水野葉舟
- 三月 「遠山村耕作語彙」(『民間伝承』)・水野葉舟
- 四月 「甲田健之助翁の聞き書」(『野鳥』)・水野葉舟
- 五月 「山といふ言葉拾ふ」(『方言』)・篠田定吉
- 十一月 「下総に於ける食物一般」(『旅と伝説』)・小川景

昭和十四年

- 四月 「五十年來の衣服の変遷(下総)」(『旅と伝説』)・

小川景

- 四月 「妖怪名彙」(『民間伝承』)・水野葉舟
- 五月 「増間の馬鹿話」(『旅と伝説』)・押尾孝
- 七月 「正月の遊芸人其他」(『同』)・小川景
- 九月 「下総郷土談話会について」(『遠つびと』)・水野

葉舟

昭和十五年

- 一月 「北総台地」(『旅と伝説』)・水野葉舟
- 一月 「下総の餅と伝承」(『同』)・小川景
- 四月 「村とその周囲の自然」(『文芸文化』)・水野葉舟
- 七月 「下総郷土談話会記録」(『遠つびと』)・水野葉舟
- 十一月 「同」(『同』)・水野葉舟
- 十一月 「気象に関する、方言、訛語(下総)」(『旅と伝

説』・篠田定吉

昭和十六年

- 二・三月 「植物の土地名」(『旅と伝説』)・水野葉舟
- 七月 「下総郷土談話会記録」(『郷土』)・水野葉舟
- 十月 「下総に於ける子の神の信仰」(『国学院雑誌』)・

水野葉舟

昭和十八年

- 四月 「村の神々」(『千葉新報』)・水野葉舟
- 六月 「民俗探求」(『同』)・水野葉舟

数は多くはないが、柳田と水野、またそこから、会員へと結ぶラインがみえてくるテーマが続いている。

そこで、郷土談話会の幹事篠田定吉と、小川景(景子)の二人を例にだして、考えてみようと思う。

篠田の論文について、葉舟は、『旅と伝説』に発表する前、次のように述べて評価している。

「四 採集報告の價値

これは、『さそり』に送られたのではないが、篠田君が採集した「天候に干する俚諺」はかなりいいコレクションであった。篠田君の細かい注意もいし、とにかく宗像村だけにあれだけの数があったとすると、かういふ仕事を進めて行くのに非常に張り合になる。

一体、吾々は今まさに前代の生活の中に生じ、それを支配

してゐたいろいろのものが、新文化の爲めに消滅しようとしてゐる瀬戸際にあると思ふ。今七十代の人も、既に明治になろうとする頃の生れである。かういふ人々の記憶の中に文献のない貴重な前代の生活相の跡がある。それがいくらかづゝ生きて伝つてゐるが、しかしだん／＼滅びようとしてゐる。

今採集する急務がここにある。(中略)

篠田君の今度の仕事は、大に意を強くした。」

こうやって、篠田定吉の『旅と伝説』誌上に発表した論文に刺激を受け、前述したように『方言』と『旅と伝説』に會員の採集報告を載せていくのである。

この文は、さらに続けて次のようなことを述べている。

「小川景子さんがお手玉、まりを中心とした『遊び』の採集してくれたが、これは余り現在すぎて——それでもいいと思うが——もっと他のがほしいと思った。

私がやりかけてゐる「川津場囃し」に誰かの助力がほしい。今の篇第九番までしか進んでゐない。」

「川津場囃し」とは、全国に分布する馬鹿話のことである。葉舟は、すでに昭和六年から七年にかけて、『国民文学』や『郷土研究』において、動植物や行事・信仰などについての民俗についての報告をしていて、この「川津場囃し」についての次のように述べたのだった。

「かつて「寒田はなし」(Sawada-banashi)とゆうシリー

ズが豊前国京都郡の寒田村を中心として話されているのについて、柳田さんにその性質を説明して頂いたときに「馬鹿村のはなし」と言われた、その「馬鹿村のはなし」の一組が、山武郡千代田村川津場を中心としてこちらで話されている。私は、その話が約三十位もあるかと予想して、コレクションにかかっている。」(「開墾の見聞」『郷土研究』昭和七年三月)

三十ほどの話を集めにかかったが、なかなか一人では集めきれず、四年たつてからも、なお、「誰かの助力がほしい」と言うのである。葉舟の呼びかけに応えたのが、「馬鹿話」を集めた押尾孝や山田美也であった。

もう一人、ここで述べている小川景子についてみてみよう。

葉舟は、小川景子の集めた子供の遊びについて、「余り現在すぎて」もっと他のが欲しいと注文をつけている。

この注文を受けて書き直したのが、『方言』(昭和十二年十月号第七巻八号)に発表した「植物による子供の『遊び』とその呼び名」であろう。

小川景(景子)は冒頭に次のように書き、葉舟の注文を考慮に入れたことを明らかにしている。

「田舎の子供達の遊戯は、周囲の豊かな自然の中から生れて居る。自然は彼等にとつて楽しい遊び場であり、常に搖籃の唄を歌つてくれる大きな母である。(略)

その中で一番彼等に密接な關係を持つて居るのは植物であ

った。

かつて、幼ない日の私も同じやうにそれ等を作つて遊んだ。私は今、それをぼつ／＼思ひ出しながら、それに今の子供達や二三の年寄達から聞いた遊びを添へて、思ひ出すまゝに記して見たいと思ふ。其處には相當古くから傳はつて居る遊びのある事も書き添へて置かねばならない。」

この小川景子の姿勢に、葉舟の指導があり、さらにその背景には、次のような柳田の思想があることは明らかである。

「言語は食物着物に次いで、大切な我々の生活手段であるが、まだ其現象には観察せられざる部分が多いかと思ふ。私はつい此頃から、物の名に現はれて居る児童の生活、殊にそれが大人の立派な社會と、交渉をもつて居る點を考へて見ようとして居る。學問のすきな若い教員諸君の加勢を求める爲、少しづつ問題の興味を説くことを許されたい。一寸考へて見ると、子供は歴史の最も新しい製作者で、且つ豊かなる未來を貯へ、急いで尋ねて遣らずとも、やがて自ら報告をするであらうから、消えて行くものゝ保存ならば、先づ老いたる村の人々に行かねばならぬやうであるが實際は必ずしもさうで無い。〔小さき者の聲〕『信濃教育』昭和二年十一月）

子供は、過去を保存し、造語能力をもつという柳田の児童観は、民俗学の据野を拓げるためにあつたと言つても過言ではない。

こうして、柳田の學問は日本各地に幾人も小川景子をつくつてもいったが、葉舟を中心として、次々と『方言』『旅と伝説』に報告を供給していく郷土談話会は、柳田と一対一で育つていった民俗學者達とは、違つた雰囲気醸成してきている。

論文の流れとしても、小川景子に続いて、葉舟の「草木の土地名」〔『方言』昭和十三年一月）、柳田国男の「草の名と子供」〔『愛育』昭和十四年一月）と続いていて、學問の蓄積をも感じさせてくれるものである。

柳田は「草の名と子供」を次のような確信のなかで書き綴っている。

「名を付けるといふことそれ自身が或は昔の子供の遊びのうちであつたので、此様に覚え切れないほどの新らしい名が、次から次へと出來たのではないかと思ふ。私などの郷里では畠に夏生える草の「すべりひゆ」を蛸草又はタコと謂つて居た。是はあの草の莖の色とつやが、如何にもゆで章魚とよく似て居るから誰にでも附けられる名だと自分なども思つて居た。多分友だちの一人がさう謂ひ出したのだらう位に考へて居た。後に大阪府でも奈良縣でも、同じ言葉があることを聴いて、寧ろ遠方の一致を珍らしく感じたことである。下總の利根川べりに來て見ると、子供は皆此草をヨッパラヒと呼んで居た。是は抜き棄て、少しの間置くと、莖の色が著しく赤

くなるからの名で、やはり遊びながらも自然に付けられるほど手軽な名だが、關東では他にもさういふ土地が多いやうである。一人が發明してそれが遠くへ運ばれたので無く、そこでも爰でも別々にさう呼ばずには居られなかつたのではないかと思ふ。」

言葉は伝播するという仮説を「方言周圍論」と呼びながらも、一方で、子供の造語能力の一般性に思いをはせる柳田の学問は、小川景子や水野葉舟らの報告によってその据野を広げることができたのである。

はじめは、詩をつくっていた景子であったが、『さそり』の同人になってから、葉舟にかわいがられ、郷土談話会の幹事をしたり、雑誌に論文を発表したり、葉舟の手足となって活躍するようになった。しかし、景子の論文は、昭和十五年一月の『旅と伝説』に載せた「下総の餅と伝承」が最後となった。若くして病に冒され、翌年二月、帰らぬ人となったのである。

葉舟の「大水野日記」(近代文学館蔵)の昭和十六年二月十日の項には、ただ一行の次の言葉がある。

「△橋浦泰雄氏より手紙、景子のくやみ」

十二日には「小川景子に手紙」と書いた後、「千葉新報 今日のに景子永眠の記事有り」とある。短い文章からよけいに葉舟の落胆ぶりを伺うことができよう。

草木と子供の遊びに目をつけた小川景子の発想と方法は、柳田の『こども風土記』(昭和十六年四・五月)によって完成するが、景子はそれを見ることはなかつた。

四 葉舟の民俗採集

前述した葉舟の「川津場囃し」のような馬鹿話への関心は、大正末にまでさかのぼることができる。それは言うまでもなく、柳田が昔話研究の会を「吉右衛門会」と名づけたところと一致している。

冒頭で述べた遠野市立博物館蔵の葉舟宛葉書のなかの一枚に、今まで「柳田国男年譜」に記載されることのなかつた「第三回吉右衛門会」の案内がある。

「第三回の吉右衛門会を開きます。場所は京橋通千代田館内富士見軒食堂、時は十二月七日の夕五時過ぎからです。

今度は昔話と技藝との關係、殊に「面白い」とは何ぞやといふことを御一緒に考へて見たいと思ひます。之に關して最近旅行から還つて來た早川孝太郎君の見聞雑話を御願ひ申して置きました。

若し時間があつたら説話分類法に關する皆様の御意見が伺ひたいと思ひます。

食事の支度の入用な方だけは必ず御出席の御通知を下さい。會費は例の通り三圓、食事せぬ方の會費は思召のこと

十一月二十九日

柳田 國男

この他にも、発会した二月十六日の「吉右衛門会」にぜひ出席するようにとの葉書もある。柳田は、水野の関心を生かすような配慮をしているのである。

しかし、葉舟の馬鹿話の採集は思うようにはいかず、郷土談話会の会員の協力を仰ぐことになるのだった。

国語教育の研究会や『さそり』や郷土談話会を組織しながら、葉舟は自らの関心を、民俗の採集や記録へと絞っていった。

その第一歩の決意は、『国民文学』に連載した「下総開墾の記録」の「前書き」(昭和四年三月)によく表われている。

「『下総開墾の記録』といふ題をつけて見はしたが、内容はずつと片寄つたものになる。それを前に断つて置き度い。

此のコレクションは、私の住居の中に、或る程度の此の土地の植物を集める仕事と並んで、「やつて見よう」としてゐる仕事の一つである。

例の五萬分の地圖——『成田』をひろげて三里塚を中心としその上に不整形の圓をかく。それをまづ私のコレクションをする土地の範圍として見る。で、私は自分の題目をかういふ範圍に限めて考へた。民話、謠言、言葉、動植物、部落の歴

史、怪異……

そこで、私ははてしない旅に出る心持で、この下総高原の平地を心に描く。」

「集める材料は無限」といいながらも、葉舟は、自分の関心のおもむくまま、散文調で収集、記録していく。

その項目を列挙すると次のようになる。

「こめ、雉、山鳥、狸の火、請所、大清水雜記、道、鷹、エミグラント(移住者)、救民、力民、狐、小鳥の消息、下総高原の草と木、下総の牧の名、屋号、神かくし、川津場はなし、氣象の予知、狸、獸、蛇、街道、臼子、古村雜話、燈火、行事、氣象、法華塚雜記、開墾の名、鳥の消息、野馬どり、言葉、動植物の地の名前、新田山回想」

といった具合である。思いつくままに、あるいは採集する度に、『国民文学』に発表していくが、この無秩序さのなかに、民俗学の初発の動機が隠されていると言つてもよいであらう。

この中のひとつに「神かくし」がある。少し長くなるが引用してみよう。

「この平原では、神かくし——広い意味で考えた神かくしが、かなり多くはないかと思われる。柳田国男氏の『山の人生』で説明された社会病理と見られる現象が、相当にあるものと私はひそかに心で予期している。極めて単純な神経の持

ち主である人々が、極めて単調な生活をしているその土地が、珍らしく茫莫とした平野であるという点から、も一つは極くプリミチティブな信仰、迷信の中に生活しているという点が、この現象を誘い出す上に、かなりよく働く力になると、私は思われる。

まずそういうような議論してみたことは、別の場所、別の機会にゆずろう。そこで近頃聞いた神かくしの一つを書くことにしよう。この話には細部にいくつかの要点がおちているが、平野の村らしい話で面白い。この欠けた細部はあとで補うこととしよう。

六軒屋の八衛門さんの話。両国の部落で某の三女が——その時七つか八つ位だった——夕方になっても帰って来ない。そこで近所の大騒ぎになって、殆んど両国全部が出はらって迷子捜しを始めた。石油の缶を叩いて、「迷子の迷子のお竹やあい」と呼びながら、午後六時頃から夜の十二時までそこらじゅうを捜して歩いた。田圃のふち、藪、井戸の中、納屋、いろいろのものの積み重ねてある場所。

それでもその迷子のお竹は見つからない。そこで捜し人たちは一まずその家に帰って、一杯のみながら休んでいると、その食事がすんだ頃に、当人のお竹が井戸のふちに、ぼんやりした風に立っているのが見つかった。「お前は一体どこに行っていたか？」というわけでそれを家につれこんで見ると、

露の多い季節であったので、からだもぞっぷりと水につかたように濡れている。髪の毛までもずぶ濡れになっていた。

そしてその娘がいうのを聞くと「いいおばさがおれに來いと呼ぶから、その跡について行った。」とそれだけであった。そしてこの娘は、そのことがあったあと、一、二週、ふだんのようにならず、ぶらぶらしていたが、そのあとでは、すっかり快復してしまった。

さて、この娘が成人してかたづいた先きの亭主も、やはり神かくしにあった人であったという。〔『下総開墾』葉舟会昭和六十三年八月刊より引用〕

柳田の「神かくし」と比べると、あまりにもあっさりとして、読み物としてのおもしろさはないが、日常茶飯事に起こり得たでき事としての「神かくし」の様相が見えてくる。

また、『遠野物語』以降、柳田も抱いていた日本狼への興味を、葉舟自身も持ち続け、「幻の日本狼」を追ってゐる。

「狼——この平原から狼が退却したのは、もうよほど古い事と思われる。それもどこかにあの獣の痕跡がありそうなものだ、というのは、私のいつも思っている事である。三月二四日に村の学校の卒業式に行った時に、古村の人たちのよっている席でこの話を持ち出したが、鹿猪の記憶はあるが狼の話は聞いた事がない、と誰もそう言ってしまうのだった。

四月三日に山武郡千代田村朝倉の手島徹君が訪ねて来た。

雑談のうちにこの話を持ち出すと、狼の話聞いた事はないが、いた時代があったとは思われませんが、子供たちをおどかすのに「狼にくわせるぞ」といいますから、そして狼をこころではOnkameと発音しています、と教えてくれた。

これが微かに残っているこの高原の狼の痕跡であるうか。」
〔ランプの明り〕〔国民文学〕昭和七年〕『下総開墾』所収

「神かくし」や「狼」への関心だけが、柳田と共通ということではない。なかには、「灯火の変遷」を柳田の『火の昔』以前に取り扱っているなど、生活のなかから採集、記録してみようとする葉舟の姿勢は、何らかのかたちで柳田を刺激していたとも言えよう。

「灯火の変遷

この土地での灯火の変遷は、特別珍しい状態かどうか、比較を知らない私には解らないが、この間、村の小学校で開かれた郷土展覧会に珍しいランプがあるのを見たのだった。ちょうどその前後に六軒家の八衛門さんが例の通り泊りがけで訪ねて来たので、そのランプの事を話して、この老農の灯火に対する記憶を聞いて見た。(略)〔前掲「ランプの明り」昭和の初めの郷土史ブームは、各小学校段階で「郷土展覧会」を開くほどになっていた。

柳田が、『火の昔』で灯火の変遷を説く目的は、こうした各地での歴史に対する意識を自覚させることにあった。これ

は、このような葉舟の報告を前にして、その方法論の確かな手応えを感じたからこそ、成せる技であったと思うのである。このことは、語彙の収集についても同じことが言える。柳田が「語彙集」編纂に力を入れていく時期と重なるように、葉舟も、「成田」周辺の小さな範囲にしぼって、採集を行なっているのである。

柳田の言う「郷土研究は小さな単位で」という方針を、身をもって実践したのが葉舟であった。

しかも、山村調査に代表される「日本民俗学」のその後の調査形態を決定してしまうような時期にある。葉舟の独自性が、柳田の眼にどう映っていたのか、あるいは映らなかったのかを検証することが、今後の私自身のテーマとして残ってくる。

昭和十六年十月の『國學院雑誌』第四十七巻第十號の「民間信仰研究號」に葉舟は、「下総に於ける子の神の信仰」と題する報告を載せた。

編集責任者である高崎正秀は、この特集の意味を次のように述べている。

「最近矢継ぎ早に柳田先生の論著が刊行され、先生の学問が深く廣く世間に浸透して行った。そして、今春は榮えある朝日文化賞が先生の御業績の上に輝いたのである。世間は認識を改めずに居られなくなつた。各誌は競うて先生の御執筆を

載せ専門誌もどんく、民俗學關係の特輯を編んだ。こゝに「民間信仰研究號」を特輯しつつ、私かに感懐切なるものある所以である。

此度の聖戦が、亜細亜が亜細亜を取り返す戦ひであるならば、柳田、折口両先生の學問は、日本が日本を取戻す學問であると云ふに躊躇しないといふことを、私はこゝに信念を以て斷言しよう。」(一つの感想——編輯室から——)

この号は、柳田国男の「龍王と水の神」を巻頭論文として、早川孝太郎、鈴木棠三、白田甚五郎、宮本常一らの論文が並んだ。葉舟の報告は、「二十三夜様」の箱山貴太郎、「箒神に就いて」の高木誠一、「雷電信仰に就て」の角田序生、「琉球の火の神」の比嘉春潮と共に企画されたものである。

箱山も報告の冒頭、「右の題を頂いて」と記しているので、編集部からテーマを与えられて書くといったものであった。葉舟は続けて、昭和十八年四月の『千葉新報』に「村の神々」、六月に「民俗探究」などを発表し、柳田民俗学の普及に努めている。

そんな折、橋浦泰雄から「柳田国男先生の古希記念論文集」に何か書いて欲しいとの依頼を受けている。葉舟は、その時の日記に、すぐ「村とその周囲の自然」という題を記入している。これは、かつて、『文芸文化』に発表した論文の題名であったが、葉舟の頭の中には、「下総開墾の記録」から

「農家語彙集」「方言調査」に至る民俗採集と、大黒さまや、荒神さまなどの様々な神の研究など、今までの集大成を考えたようである。

しかし、その論文を完成することなく、敗戦を迎え、昭和二十一年の秋ごろから健康を害して、『さそり』の復刊を願いながら病の床に伏した。

年が明けて、二月二日、肋膜炎をこじらせ死の旅へたつが、考えてみれば、柳田と出会ってから四十年の長い歲月、時には、柳田の相談相手、時には、柳田への資料提供者として常に一歩後ろを伴走してきた生を終えたのであった。

柳田が敗戦後、「働かねばならぬ世」と言い、教育に情熱を傾けたことを考えれば、葉舟の戦後もまた、柳田と共にあったと思わざるを得ない。

同時に、民俗学会の中枢から離れ、下総の台地にこだわり続けた葉舟が、民俗学研究所の閉鎖の状況を見たとしたら、何を感じたであろうかとも思う。

この辺りで、三回にわたって本誌で発表させていただいた拙い水野葉舟論の筆を置きたいと思う。今後、葉舟の生き様を、伝記的に追うことをしてみたいと思っているので、御批評や資料等寄せていただきたい。

(本研究所会員・柳田国男研究会会員)

伊那民俗研究

第 7 号

1997年6月